

寺田寅彦全集

第九卷

寺田寅彦全集 第9巻 (全17巻)

1961年6月7日 第1刷発行 ©
1979年2月14日 第7刷発行

¥800

著 者 寺 田 寅 彦
発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発 行 所 株式会社 岩 波 書 店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・青木製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

隨
筆
九

目次

ピタゴラスと豆	七
山中常盤双紙	一〇
夕なぎと夕風	一三
鷹をもらいそこなつた話	一六
観点と距離	一八
喫煙四十年	二一
初旅	三三
雑記帳より(Ⅱ)	三六
ゴルフ随行記	四三

子規自筆の根岸地図	四九
藤棚の陰から	五二
とんびと油揚	六五
明治三十二年ごろ	七〇
地図をながめて	七三
映画雑感(Ⅲ)	一〇四
疑問と空想	一二五
破片	一三〇
天災と国防	一四四
あひると猿	一五五
鳴突き	一六二
追憶の冬夜	一六六

夢判断	一七二
新春偶語	一七五
新年雑俎	一七九
相撲	一八四
追憶の医師たち	一九〇
西鶴と科学	一九四
台風雑俎	二〇八
詩と官能	二二〇
からすと唱歌	二二四
物売りの声	二二六
ペルリン大学	二三四
五月の唯物観	二四四

ピタゴラスと豆

幾何学を教わった人はだれでもピタゴラスの定理というものの名前ぐらひは覚えていてであろう。直角三角形のいちばん長い辺の上に乗った枳形まがたの面積が他の二つの辺の上に乗った二つの枳形の面積の和に等しいというのである。オルダス・ハクスレーオクスレーの短編「若きアルキメデス」には百姓の子のギドーが木片の燃えさしで舗道の石の上に図形を描いてこの定理の証明をやっている場面が出て来るのである。また相対性原理を設立したアインシュタインが子供のときにひとりこの定理を見つけたとかいふ話が伝えられている。この同じピタゴラスがまた楽音ハモニーの協和と整数の比との関

係の発見者であり、宇宙の調和の唱道者であったことはよく知られているようであるが、この同じピタゴラスが豆のために命を失ったという話がディオゲネス・ライルチオスライルチオスの哲学者列伝の中に伝えられている。

このえらい哲学者が日常堅く守っていたいろいろな戒律の中に「食ってはいけない」というものがいろいろあった、たとえばある二三の鳥類、それから獣類の心臓、反芻類はんそうぶいの第一胃、それから魚類ではかながしらなどがいけないものに数えられているほかに、豆がいけないことになっている、この「豆」(キユアモス)というのが英語ではビーンと訳してあるのだが、しかしそれが日本にあるどの豆に当たるのか、それとも日本にはない豆だかわからないのが遺憾である。それはとにかく、なぜその豆がいけないかという理由についてはいろいろのことが書いてある。胃の中にガスがたまるからとか、また「生命の呼吸の大部分を分有するか

ら」とか、あるいはまた「食わないほうが胃のためによく、安眠ができるから」とか書いてあるかと思うと、またアリストテレスの書物を引用して、「豆は生殖器に似ているから、あるいはまた地獄の門のように、ひとりずつがい目が離れて開くから」ともある。なんのこともかやはりよくわからない。それからまた「宇宙の形をしているから」とか「選挙のときのくじに使われる、従って寡頭政治を代表するものだから」ともある。それはさておいて、ピタゴラスの最期についてもいろいろの説があるがその中の一つはこうである。

一日ミロにおける住宅で友人たちと会合しあつていたときだれかがその家に放火した。それは仲間に入れてもらえなかつた人の怨恨うらみによるともいわれ、またクロトンの市民らがピタゴラス一派の権勢があまり強すぎて暴君化することを恐れたためともいわれている。とにかくピタゴラスはにげ出して行くうちに運悪く豆

畑に行き当たった。そこでかれは、戒律を破って豆畑に進入するよりは殺されたほうがましだといって逃走をあきらめた。そこへ追いついた敵が彼の咽喉のどを切開したというのである。

一方ではまた捕虜になつて餓死したとか、世の中がいやになつて断食して死んだとかいろいろの説があるからほんとうのことはなんだかわからない。しかし豆畑へはいるのがいやでわざわざ殺されたというのがほんとうだとすると、それは胃に悪いとか安眠を害するとかいうだけではなくて、何かしら信仰ないし迷信的色彩のある禁戒であつたであらう。

このピタゴラスの話がまるでうそであるとしても、昔のギリシアかローマに何かそれに類する「禁戒」「タブー」*「物忌み」といったようなものがあつたのではないかという疑いをおこさせるには充分である。

このごろ、柳田国男氏の「一つ目小僧その他」を見

ると一つ目の神様に連関して日本の諸地方でいろいろな植物を「忌む」実例がたくさんに列挙されている。その中に胡麻ゴマや黍キヌや粟アワや竹やいろいろな果実があったが、豆はどうであったか、もう一度よく読み直してみなければ見落としたかもしれない。それはいづれにしてもピタゴラスの豆に対する話はやはりこうした「物忌み」らしく思われるのである。「きらう」ともちがうし、「こわがる」ともちがう。

故芥川竜之介君が内田百閒君の山高帽をこわがったという有名な話が伝えられている。これは「内田君の山高帽」をこわがったのか「山高帽の内田君」をこわがったのか、そのところははっきりと自分にはわからないが、しかしこの話の神秘的なところがなんとなくピタゴラスの豆を自分に思い出させるのである。ピタゴラスはイタリアで長い間地下室にこもっていた後にやせ衰えて骸骨のようになって出て来た。そう

して、自分は地獄へ行つて見物して来たと言言して、人々に見て来たあの世のさまを物語って聞かせたら聞くものひどく感動して号泣し、そうして彼はいよいよ神様だということになった。地下室にいた間は母にたのんで現世の出来事に関する詳細なノートをとって、それを届けてもらつて読んでいたという話も伝えられている。これではまるで詐欺師であるが、これはおそらく彼の敵のいいふらした作り事であろう。

ピタゴラス派の哲学というものはあるが、ピタゴラスという哲学者は実は架空の人物だとの説もあるそうである、いよいよ心細くなる次第であるが、しかしこのピタゴラスと豆の話は、現在のわれわれの周囲にも日常頻繁ひんぱんに起こりつつある人間の悲劇や喜劇の原型プロトタイプであり雛形モザンであるとも考えられなくはない。いろいろの豆のために命をおとさないまでもいろいろな損害を甘受する人がなかなか多いように思われるのである。それ

をほめる人があれば笑う人があり怒る人があり嘆く人がある。ギリシアの昔から日本の現代まで、いろいろの哲学の共存することだけはちっとも変わりが無いものと見える。(昭和九年七月、東京日日新聞)

山中常盤双紙

岩佐又兵衛作山中常盤双紙というものが展覧されているのを見した。そのとき気づいたことを左に覚え書きにしておく。

奥州おうしゅうにいる牛若丸うしわかまるに会いたくなった母常盤ときわが侍女を一人つれて東あづまへ下る。途中の宿で盗賊の群れに襲われ、着物をはがれた上に刺殺される、そのあとへ母をたずねて上京の途上にある牛若が偶然泊まり合わせ、亡霊の告げによってその死を知る。そうして復讐ふくしゅうを計画し、詭計きけいによって賊をおびき寄せておいて皆殺しにする。後日再び奥州から大軍の将として上洛じょうらくする途上この宿に立ち寄りねんごろに母の霊を祭る、という物語を絵

巻物十二巻に仕立てたものである。

絵巻物というものは現代の映画の先祖と見ることが出来る。これについては前にも書いたことがあったが、この山中常盤双紙は、そういう見方の適切なことを実証するのに都合な一例と見ることでもできる。

絵巻物のいろいろな場面の排列モンタージュまた一つの場面の推移をはこぶコマ数の按配、テンポの緩急といったようなものに対する画家の計画にはちょうど映画監督編集者のそれと同様な頭脳のはたらきを必要とすることがわかる。

映画としてのこの絵巻のストーリーは、さるかに合戦より忠臣蔵に至るあらゆる仇討ち物語に典型的な型式を備えている。はじめは仇討ち事件の素因への道行きであり、次に第一のクライマックスの殺し場がある。その次に復讐への径路があつて第二の頂点仇討ちの場になる。そうして結局の大団円なりエピローグが来る。

そういう形式がかなりはっきりしているのが目につく。映画のタイトルに相当する詞書きの長短の分布もいろいろ変化があつておもしろく、この点も研究に値する。

二つのクライマックスの虐殺の場がかなり分析的にコマ数を多くして描写されている。展覧会場では、この二つの頂点のところの肝心な数コマが白紙でおおわれて「カット」されていたことから見ると、相当に深刻な描写があつて人間の隠れた本能を呼びさますものがあるものと見える。

全十二巻の詞書きというものを売っていたので買って見ると、詞書きの上段に若干の画面の写真版が並んでいて、その中には上記のカットされたものの中の二三があるのでたいの想像ができる。第一の頂点では常盤と侍女と二人が丸裸にされて泣き騒ぎその上に無残に刺殺され侍女の死骸は縁側から下へころがされ

るといふいきさつが数コマにわたって描かれてあるらしい。また第二の山では牛若丸が六人の賊をめちゃくちゃにたたき切る、そうして二つ三つに切った死骸を蓆で包んで川へ流しに行くまでを精細な数コマに描き分けたものらしい。

こういうことから考えてみると、この絵巻物は、一方では勧善懲悪の教訓を含んでいると同時に、また一方ではおそらく昔の戦乱時代の武将などに共通であつたろうと思われる嗜虐的なアブノーマル・サイコロジ¹に對する適当な刺激として役立つものであろうと想像される。ことに第一のクライマックスは最も極端なアブノーマル・エロチシズムの適例として見ることもできはしないかと想像される。

こういうものがいかなる時代にいかなる人の需めによつていかなる人によつて制作されたかといふことはいろいろな問題に連関して研究さるべき興味ある題目

となるであろうと思われる。

それにつけて思い出されるのは、仏教や耶穌教の宗教画の中にも、この絵巻物の中に現われているような不思議な嗜虐性要素のしばしば現われることである。十字架のキリストや矢を受けた聖セバスチアンもそうであるし、また地獄交相図やそれに似た耶穌教の地獄図、聖アントニオの誘惑の絵の中にも同じようなものが往々見いだされる。こういう一致は偶然のことではなくて深い奥のほうに隠れた人間の本性に根を引いていることだろうと思われるのである。

このあいだ映画で見たが、インドの聖地では、自分の肉体を責めさいなむことを一生の唯一の仕事にしている人間がたくさんいるようである。どうも不思議なことだと思われたが、よく考えてみるとこのなぞが少しわかりかけたような気もするのである。

(昭和九年七月、セルバン)

夕なぎと夕風

夕なぎは郷里高知こうちの名物の一つである。しかしこの名物は実は他国にもほうほうにあって、特に瀬戸内海沿岸にこれが著しいようである。そうして国々で○○の夕なぎ□□の夕なぎといつて他の名物を自慢するようになり自慢にしているらしい。普通は特有なよいものを自慢にするのだが、たまにはあまりよくない特色を自慢する場合もあるのである。

アインシュタインが有名になりかけたころ、ほうほうの国々で、彼は自分の国の出身であるといつていい争ったことがあった。そのときアインシュタインが「もし私が *Déte noire* だったらこんなことはあるま

い」といつて皮肉に笑ったそうである。なるほど弓削道鏡ぢゆうけいが自分の同郷出身だといつて自慢する人はあまりないかもしれないが、しかし石川五右衛門いしかわごの同郷者だといつてシニカルシニカルな自慢を振り回す人はあるかもしれない。

それはとにかく、暑い国の夏の夕なぎは、その肉体的効果から見ればたしかに、ベート・ノアルであるが、しかしそれが季節的自然現象であるだけにかなりに多彩な詩的題材を豊富に包蔵していることも事実である。夕なぎは夏の日の正常な天気のとくにもみ典型的に現われる。午後の海軟風とら(土佐ではマゼマゼという)が衰えてやがて無風状態になると、気温は実際下がり始めていても人の感じる暑さは次第に増して来る。空気がゼラチンか何かのように凝固したという気がする。その凝固した空気の中から絞り出されるように油蟬あぶらせみの声が降りそそぐ。そのくせ世間がいつたいに妙にしんとし

て静かに眠っているようにも思われる。じっとして
ると気がちがいそうなうっとうしさである。この圧迫
するような感じを救うためには猿股さるまた一つになって井戸
水をくみ上げて庭木などにいっぱい打ち水をするとい
い。葉末からしたたり落ちる露がこの死んだような
自然に一脈生動の気を通わせるのである。ひきがえる
がはい出して来るのもこの大きな単調を破るに充分で
ある。夜の十二時にもならなければなかなか陸風がそ
よぎはじめない。室内の燈火が庭木の打ち水の余瀝よたぎに
映っているのが少しも動かない。そういう晩には空の
星の光までじっとしてまたたきをしないような気がす
る。そうして庭の木立ちの上にそびえた旧城の一角に
測候所の赤い信号燈が見えるとそれで故郷の夏の夕な
ぎの詩が完成するのである。

そういう晩によく遠い沖の海鳴りを聞いた。海拔二
百メートルくらいの山脈をへだてて三里もさきの浜べ

をとどろかす土用波の音が山を越えて響いてくるので
ある。その重苦しい何かしら凶事を予感させるような
単調な音も、夕なぎの夜の詩には割愛し難い象徴的景
物である。

東京という土地には正常の意味での夕なぎというも
のが存在しない。そのかわりに現われる夏の夕べの涼
風は実に帝都随一の名物であると思われるのに、それ
を自慢する江戸っ子は少ないようである。東京で夕な
ぎの起こる日はたいがい異常な天候の場合で、その意
味で例外である。高知や広島ひろしまで夕風が例外であると同
様である。

どうして高知や瀬戸内海地方で夏の夕なぎが著しく
東京で夏の夕風が発達しているか、その理由を明らかに
したいと思つて十余年前にK君と共同で研究してみ
たことがあった。それには日本の沿岸の数か所の測候
所における毎日毎時の風の観測の結果を統計的に調べ